世界がミレニアムイヤーで沸く 2000 年の年末、私はグアテマラの首都オーロラ空港に協力隊員の一員として降り立った。当時の若者の多くがそうであったように沢木幸太郎や藤原新也らの海外放浪記に影響を受けた私は、グアテマラの文化や人々の営みをつぶさに感じ学びそこで共に生きたいと意気込んでいた。その意味で、私の職種・村落開発普及員はそれを体現するに相応しいものであった。チマルテナンゴ県サンファン・コマラパ市の NGO に配属され、マヤ系先住民の零細企業家向け小規模金融(マイクロファイナンス)融資制度への助言や貸付先生産者への経営指導に携わる活動は、当時銀行を辞めたばかりの私にとって適職とも言えた。収穫や市場への出荷の為、朝が早い零細企業家に対応すべく、当時のカウンターパートと共に早朝から生産現場を訪れ、融資の返済計画助言や経営研修等を行った苦労しつつも充実した日々を思い出す。

当時支援した企業家には農産物加工や家畜生産に携わる女性が多かったが、その中にはマヤ伝統民芸品である民族衣装や小物などの織物生産者も含まれた。彼女らに経営指導を行いつつも、地域性と故郷の歴史、文化を一本の糸に紡ぎ、そのアイデンティティを子孫に受け継ごうとする姿勢・価値観に魅せられる日々でもあった。

隊員を終え、大学院での研究を経て JICA ジュニア専門員となった私は、大分県発祥の一村一品運動(英語名 OVOP)の普及を目指す JICA プロジェクトに関わる機会を得た。その後、アフリカのマラウイ、隊員時代の任国グアテマラ、同じ中米のエルサルバドルに OVOP 専門家として派遣され 14 年が経つ。現在、広域専門家として引き続きエルサルバドルの OVOP を中心に、ホンジュラスと併せて再びグアテマラでも OVOP の普及を支援している。

振返るに、外部投資に頼らずとも地域に存在する資源を活用し、地域のブランド化を通じた地場産業振興と地域おこしを目指す OVOP の考えを学んだのは、大分の歴史もさることながら、実はコマラパでの隊員時代だったように改めて思う。グアテマラで地域の人々から学んだ思想や得られた経験は、今、OVOP 専門家となった私の活動の原点となっている。

そのきっかけと機会を与えてくれた JICA グアテマラ協力隊事業に感謝し、同事業の派遣 30 周年を祝すと共に、今後も同事業による次世代の国際協力人材の育成継続を願う。

(写真：2001 年、隊員当時支援したコマラパの伝統織物生産女性企業家と共に)

(写真：2019 年、JICA 専門家として再びコマラパを訪れ、当時と変わらぬ織物工程に触れ、現地で OVOP 研修を行う筆者)